

Stephen Leacock

—— 人生と余暇について ——

足 田 和 人

序

Stephen Leacock は一言でいうと、自由人であった。大学では言語学を学び、大学院では政治経済を専攻した。経済学の講義をしながら、ユーモア作家として多くの読者に笑いを与えた。イギリスで生まれその伝統に憧れながら、合衆国の民主主義を肯定していた。歴史、教育、社会批評、文芸評論といった様々な分野において定まった見方や価値観に囚われることなく、彼は身の回りにある様々な主題についてカナダを定点とし精力的に執筆、発言を続けた。

彼は自分の生活に関しても、自らが望むままに都会と田舎の二重生活を享受した。夏は、彼の幼い頃の開拓時代を思い起こさせるような Orillia の田舎町に住んだ。一方彼は、McGill 大学のある Montreal で、教育に携わりながら、様々な人々と親交を温めた。そのような彼の人生に対する貪欲さは作品だけでなく、実際の生活にも大きな影響を与えていた。

そんな彼の価値観はどのようなものなのか。彼が享受していた時間を考える時、「余暇」という問題が浮かんでくる。彼はこの余暇に対する基本的な視点を、急激な変化を見せる資本主義社会に置いていた。多くの問題点を見せつつあったこの制度の中で翻弄される人間達を、政治経済学者として見つめ社会に多くの警鐘を鳴らしている。

彼自身、一度は住み込みの教師として、24時間のほとんどを他者の為に使っていたことがあった。こうした若い頃の体験からか、自らが望む余暇を享受しようとする Leacock の情熱は並々ならぬものがあった。Leacock がどのような余暇を求めたのか。そして、それらの余暇は彼にとってどのような意味があったのか。彼の人生と作品の中から、彼の求めた「余暇」の本質を探っていきたい。

1

Stephen Leacock の生活の基盤は、McGill 大学のある Montreal 市内だった。Côte-des-

Neiges Street に住居を構え、大学での仕事が続く秋、冬、春をそこで過した。Montreal で過した時間の多くは対人的なものである。Montreal での生活は規則正しいものだったという。朝5時か5時半に目を覚まし、軽くパンと紅茶を口にしてから、書齋で仕事を始める。7時頃から散歩にでかけた後、きちんとした朝食を済ませ、お昼まで仕事を続けた。授業は主に午後からだった⁽¹⁾。

大学での仕事はもちろん学生を相手にすることが多い。学内では学生達の面倒見もよく、自身の知識や時間を学生に惜しみなく与えていた。だからと言って、時間に追われるような様子でもなかった。サービス精神の豊富な彼の講義は学生の人気を博し、教室は学生で一杯だった。彼らの期待に答えるべく、経済学の授業であるにも関わらず、ユーモアに富んだ講義を行っていた。Adam Smith, John Stuart Mill, Thomas Robert Malthus などの人物が、目の前に浮かびあがってくるような講義であったという。

そして、授業が終わると必ず足を向けたのが、the University Club だった。それは彼が政治経済学部学部長になった1908年、彼が中心となって創設したものだ。ビリヤード台も置かれ、簡単な食べ物やアルコールも口にすることができる。“The University Club, in which Stephen Leacock was a guiding force throughout his active years, furnished the relaxation and the congenial companionship which he required.” (74) と Ralph Curry が伝記の中で取り上げているように、多忙な学務に加え、執筆や講演の合間に、仲間や客人と静かで寛いだ時間を過していた。

この the University Club は少々趣の変わった名前と形で Leacock の作品中に登場している。Arcadian Adventures with the Idle Rich の中に出てくる the Mausoleum Club である。この作品は経済論理にのみ支配される都市と社会を諷刺的に描いたものである。この the Mausoleum Club という場所は、作品の舞台となる Plutoria Street の富裕階級が集い、お互いの利益をもたらすための様々な情報が飛び交う社交場になっている。一見全く異なった設定のようにも思えるが、人間同士が語り合う饗宴の場所として捉えると、その共通性が浮かび上がってくる。“indeed it [the Mausoleum Club] is turned into a veritable Arcadia; and for a beautiful pastoral scene, such as would have gladdened the heart of a poet who understood the cost of things.” (9) と Arcadian Adventures で描かれているように、ここでは資本家達に対するサタイアになっているが、‘cost’ の単語を肯定的な別の言葉に変えてしまえば、それはそのまま the University Club の様子を彷彿とさせる理想の場所になってしまう。つまり、作品上での the Mausoleum Club は語られる哲学や言葉の方向性を変えただけなのである。

Leacock は保守党の熱烈な支持者として、政治に強い関心をもっていた。Montreal では支持層の薄い保守党候補者を擁護し、政治的活動を行っていた⁽²⁾。the University Club では大

学人だけでなく、様々なゲストを招き語り合う時間を共有した。人付き合いの上手な Leacock は、大学の教師と思えない程様々な人脈もできあがった。求められれば当然のように政治演説もこなした。大都市 Montreal であるから、様々な講演依頼があったことだろう。幸か不幸か、ユーモア作家としての顔が世間に知られるようになってからは、政治的なスピーチを控えるようになっていたという。聴衆が政治的メッセージではなく、笑いを求めてくるからだ。笑いとメッセージが両立しないことを、Leacock は知っていた。政治的、社会的主張は専ら著作によるものになった。

このように Montreal は Leacock にとって、学期中の活動の中心であった。John Culliton は “his home was for him a look-out to the unending horizons stretching from it.” (viii) と言っている。様々なことに関心をもち、それらの事柄について貪欲に表現しようとした Leacock にとって、Montreal と McGill 大学は、まさに刻々と変化していく世界を見渡す展望台であった。

そのように精力的な Leacock ではあったが、年度が終わると間髪いれずに Toronto の北にある田舎町へと移動した。the University Club を創設したのと同じ1908年4月15日、Leacock は1600ドルを支払い、19.73エーカーの土地を手に入れたのである。5年前に McGill 大学に職を得て以来、教育、著作、講演などで貯めた資金をもとにしたものである。Orillia という小さな町のすぐ近くにある、 Couchiching 湖の小さな入り江の一角だった。Orillia は彼が Upper Canada College のまだ若手英語教師だった頃、母親が住んでいた町であり、ボートや釣りを好み、木々や草花を愛し、水辺での生活に憧れていた Leacock にとって理想の土地であった。またここは Leacock 一家がイギリスから移住して、最初に小さな居を構えた Egypt という村から、Simcoe 湖を挟んで6キロ程しか離れていなかった。ここは彼にとって、カナダでの生活の原点であると同時に、彼のそれからの人生の変遷を見守ってきた場所であった。

Leacock はこの場所を Old Brewery Bay⁽³⁾と名づけ、最初は1部屋だけの小さなコテージを建てた。そこにはかつて実際に醸造所があったと言い伝え⁽⁴⁾があったが、その時は完全な廃墟になっていた。小さな入り江は深い木々で囲まれ、鳥のさえずりや、魚が水面を跳ねる音も耳に届くほどの静けさであった。その後何度か増築され、建物の姿は変わったが、彼の生涯を通しての憩いの場所であった。

“He used to say he could judge his visitors by that name. If they like the name Old Brewery Bay, they're all right. They can have anything on the place. I have known that name, the Old Brewery Bay to make people feel thirsty by correspondence as far away as Nevada.” (xvi) と、Leacock の姪で長い間彼の秘書をしていた Barbara Nimmo は、Leacock が亡くなった翌

年出版された *Last Leaves* の Preface の中で回想している。

彼女によれば、園芸や農作業も彼の好きな仕事であったという。トマトにえんどう豆やメロンまで栽培し、実った作物はそのまま売りに出しても良いくらいの品質だった。日曜大工も得意にっていて、鳥小屋を自分で建て、七面鳥を育てることに挑戦しさえしていた。ただし、100羽育てていたのだが次々に死んでしまい、感謝祭のテーブルにのったのは、その中で唯一生き残った一羽だった。そのための餌代と労力を考えればさぞや高くついた七面鳥であろうが、Leacock はただ笑って食べていたという。そのような様子であったから、週末になると Old Brewery Bay に人々の声が絶えることがなかった。

また、Elizabeth Kimball (彼女も Leacock の姪であり、彼の妹の娘である) は、夏になる度に顔を会わせていた叔父 Leacock の思い出を *The Man in the Panama Hat* で描いている。“The boat-house which was torn down and burned some years ago, stood just before the end of the point, on the inside shore of the bay. My uncle used the little loft over the boats as his study; I was told that *Sunshine Sketches* was written there.” (61) 彼は母屋の書斎だけでなく、少し離れたところに建っているボートハウス⁽⁵⁾の二階で、Orillia の町をモデルにし、後に彼の出世作となる *Sunshine Sketches of a Little Town* を書いていた。“As for Uncle Stephen, I have practically no recollection of him after he went off to the boathouse in late morning, so I suppose perhaps he did not return until we children had had our tea and gone to bed.” (66) という彼女の言葉から、Leacock がボートハウスで長い時間執筆作業をしていたことを窺い知ることができる。実際に筆者もこの場所を訪れたが、湖にせり出したように建てられている二階の窓から見ると、湖の中に部屋があるような感覚になった。仕事をしていながら、眼前の風景が創作のインスピレーションを与えてくれたに違いない。

“Old Brewery Bay represented many things: a place for family a rural retreat from the rigours of university life and public speaking, an estate that could grow as his fortunes improved, and a return to the beloved land and waterscape of his boyhood.” (3) と James A. McGarvey が解説しているように、Leacock にとって Old Brewery Bay は単なる別荘ではなく、彼にとって必要な余暇を過ごすための最も重要な空間だったのだ。

このように Leacock は、Montreal と Orillia の二種類の生活を使い分け、享受し、自身の人生をより豊かにしていった。金銭的負担や距離的な問題を敢えて受け入れて手に入れようとしたのは、紛れもない余暇としての自己の時間である。

ここで少し余暇という言葉について考えてみる。余暇という言葉からまず連想されるのは、遊びやスポーツ、映画や観劇などであろう。漢字からも見て取れるように、その基本的概念は余った時間に行なうものであり、人間の生活において不可欠なものではないように思

われる。実際『余暇文明へ向かって』の中で、J・デュマズディエ（Joffere Dumazedier）は余暇の機能を次のように定義している。「余暇は何よりもまず自由であり、楽しみであるというのが先に引用した調査結果の示すところである。その回答は、三つのカテゴリーに分けられ、それぞれわれわれのいう余暇の三機能、すなわち休息、気晴らし、自己開発に対応している。」(17)⁽⁶⁾ 彼の社会学的な意図は理解できるが、余暇の機能を分割しただけではその真の姿や価値は正確には見えてこないだろう⁽⁷⁾。我々が余暇を経験するとき、分割された事象を享受しているわけではない。余暇⁽⁸⁾とは、個人の内的経験なのである。

古代ギリシャの余暇論としては、まずアリストテレスが『政治学』において、「正しく治められようとする国においては生活に必要なものに煩わされない閑暇が存しなくてはならないということは、凡ての人の承認するところである。しかし、それがどんな仕方で存しなくてはならぬかを把握するのは容易なことではない。」(71)と説いている。さらに読み書き、体操、音楽、図画を教育として教える理由を「正しく仕事をするができることばかりではなく、立派に閑暇を送ることができることをも求めるからなのである。」(329)と説明する。つまり、公的な役割の中でも、個人的な生活の中でも、共に余暇は人間の高尚な営みであるとしている。

セネカは『人生の短さについて』の中でこう言っている。「万人のうちで、英知に専念する者のみが暇のある人であり、このような者のみが生きていくべきである。それは、彼らが単に自己の生涯を立派に守っているからだけではない。彼らはあらゆる時代を自己の時代に付け加える。彼らが以前に過ぎ去った年月は、ことごとく彼らに付加されている。」(258)彼の主題は人生という短い時間における、余暇の位置づけである。言い換えれば、余暇について真に論じるには、死という絶対的存在を前提にする必要があるということである。休息や気晴らしとは別次元のように感じられるが、その核心は「良く生きる」という命題につながる。余暇という言葉は怠惰や非活動的なことではなく、我々の存在の回りをとりまく、様々な精神の拘束を解き放とうとする活動なのだ。

このような先人の言葉を考えると、Leacockの都市と田舎の二重生活は理想的余暇の形式であるといってもいいだろう。デュマズディエが提唱した現代的余暇の枠組みの中に、古代ギリシャの理念を取り込み、より快適な生活を求める経済活動と、深く豊かな精神活動を両立させていたのである。Leacockは余暇について次のように語っている。“In point of leisure, I enjoy more in the four corners of a single year than a business man knows in his whole life. I thus have what the business man can never enjoy, an ability to think, and, what is still better, to stop thinking altogether for months at a time.”(viii-ix) この文章は前に述べたボートハウスで書かれた*Sunshine Sketches*のPrefaceの中にある。もちろん、高い収入を得ることが

でき、時間の自由もある大学教授という立場が、一般的な職業人に比べて特殊な状況であることは認めている。しかし、Kimballが回想していたように、彼はその自由な時間の多くの部分を研究や著作に費やしていた。湖のほとりで、移り変わる四季や一日のうつろいを感じながら、ギリシャ的な観想的生活を享受していた。それは決して単なる気晴らしや休息ではなく、研究や執筆に不可欠な極めて創造的時間だったのである⁽⁹⁾。

彼にとって余暇の意義は若い頃の経験がもとになっていて、Leacockは早くから余暇の意義を認識していた。彼には昔、高校の教師と寮長も勤めていた頃の体験がある。*My Remarkable Uncle*の中で、John Stuart Millが、昼間の会社務めをしながらも時間を削って著作に励み、ついにその仕事から解放され文筆生活に入ることができたというエピソードを紹介している。同じように、彼自身も教師として24時間気を抜くことのできなかつた辛い状況から、睡眠時間を削った研究と文筆によって大学院に進みPh.Dまで取得し、ようやく脱出できた経過をユーモアを交え語っている⁽¹⁰⁾。また、*How to Write*では、“It seemed to me that my life as a resident schoolmaster was so limited and uninterested that there was nothing in it to write about. Later on, when I had learned how, I was able to turn back to it and write it up with great pecuniary satisfaction. But that was after I had learned how to let nothing get past me. I can write up anything now at a hundred yards.”(vi)とあるように、自分の時間を取り戻すことで、今まで書けなかったことが書けるようになったと振りかえっている。それは、それまで見えていなかったものが、精神的な余裕が生まれたことで、自分の目で見とれるようになったということである。つまり、書くことは自分の回りで起こっていることを、精神の手中に収めることだと知った瞬間なのだ。余暇の概念もこれと同じことである。余暇とは管理された時間の中で生きていくのではなく、何か仕事を成すための自己の時間を、自らの管理下に取り戻す作業なのである。

当然、時間の管理は空間の制御と重なる。同じ作業をするにしても、他者によって決められた場所にいないてはならない状態と、自分でその場所を選ぶことには大きな差が生じる。創造的な作業をする場合はなおさらであろう。簡単に言ってしまうと、オンとオフの切り替えが自律的に可能であるかどうかなのである。そしてオフを選んだ時、すぐにその行動に移ることのできる環境が求められる。生活がある程度安定してから、時をおかずにそのような物件を探しあてたことはLeacockにとって僥倖だった。Old Brewery Bayは彼にとって約束された土地だったのかもしれない。

政治経済、文学、歴史、そして教育に至るまで、さまざまなことに興味をもち、それぞれのテーマで思索を重ね執筆を続けようとしたLeacockにとって、その為の環境を選び、時間をつくらうとしたことは必然的なことだったのである。

2

余暇の時間は、遊びの時間であると言える。遊びの根本的な性質に関してはホイジンガは『ホモ・ルーデンス』において論じている。「すべての遊びは、まず第一に、何にもまして一つの自由な行動である。命令されてする遊び、そんなものはもう遊びではない。」(29)と彼は述べているが、余暇の時間にする遊びに関して、自由であるということを強調している。そして「遊びは、人間がさまざまな事象の中に認めて言い表すことのできる性質のうち、最も高貴な二つの性質によって充たされている。リズムとハーモニーがそれである。」(36)とも言う。自発的に行ない、それによりある種の調和がもたらされる。それは精神と肉体の均衡と行うことができる。⁽¹¹⁾

Leacock にとっての Orillia は、まさに調和のとれた自由の場所であった。教育や学務から解放され、自己の時間を、他者によって縛られることなく過ごすことができた。前にも述べたように、自由だからといって彼が何もしていなかったわけではない。執筆活動に当てる時間は、Montreal での生活よりも多くあてられていた。他方、湖に面し自然に囲まれたこの地を別荘に選んだ Leacock の熱意は、同様に「遊び」に対しても向けられていた。

まず何よりも、彼は自他共に認める釣り好きであった。釣りといっても、*Remarkable Uncle* で、“I admit that I only know of fishing on a somewhat limited and humble scale — I know nothing, for example, of the ‘Big stuff’ of salmon fishing.” (85) と語るように、大きな魚と長時間かけて格闘するような荒荒しく躍動感あふれる釣りではなく、川面や湖で自然に溶け込むようなどちらかという静かな釣りである。この土地に建てられた最初の建物は、小さなボートハウスであることからわかるように、彼はそのような静かな湖の上で過す時間に憧れていたのである。

So it may not be without interest to outdoor people — anglers, men of the bush and streams and such — to turn over again the pages of the old volume [*The Complete Angler*] and see what Izaak Walton can teach us. This, especially, if we can catch something of the leisurely procedure, the old-time courtesy and, so to speak, the charming tediousness of people with lots of time, now lost in our distracted world. (13)

Last Leaves においてこのように語る Leacock の筆致は滑らかである。彼が Izaak Walton から学んでいるのは釣りの方法や技術ではない。木陰で飲む一杯のエールは、堅苦しい晩餐会よりも甘美であり、古くからある民謡が壮大なオペラよりも格段にすぐれている、という

いう人生観であり、そしてその喜びを表現している Walton の言葉自体なのである。

Leacock にとって釣りにおける時間は、他では得られない特別な時間である。滑らかな水面に映る緑の山々、岸辺に細かく立つさざ波、空を飛ぶ小鳥の鳴き声など、豊かな自然が人間を包んでくれる。そして、ある瞬間に突然やってくる魚のあたりを感じ、静から動への瞬く間の変化が起こる。まさに、“For fishing, as I see it, is in reality not so much an activity as a state of mind.” (86) と Leacock がいうように何者からも制御されない、自然の時間と精神の状態なのである。

My Remarkable Uncle 所収の “When Fellers Go Fishing” で Leacock は、釣りをしている人間の心は広く、細かいことで喧嘩や論争はしなくなると言っている。なぜなら、近くを流れる滝の音で隣の人が言っていることが聞えないからだ。釣りの腕前と同じくらい、ユーモアのおちも見事である。ただし、彼がひとつだけ私達に忠告していることがある。それは、大勢のグループでは決して行ってはいけない、ということだ。“The magic is all gone!” (94) とくり返しているのは、釣りの時間は魔法の時であり、社会の時間と両立するはずがない、という彼らしい警句なのである。

釣り以外にも彼が愛したことがある。それは旅である。そこにも彼の余暇観を探るヒントが隠されている。講演旅行を始めとして、Leacock は世界中の多くの場所を訪れた。講演は仕事のひとつではあるが、そのことから離れてしまえば、旅行も遊びのひとつである。したがって、彼の旅先でのエピソードは余暇を考える上で重要となる。

My Discovery of England は、ロンドンでの講演旅行で見聞きしたことをもとにしている。“Impression of London” では、彼が自分で決めたロンドンでの予定を紹介している。

1. Go to bank.
2. Buy a shirt.
3. National Gallery.
4. Razor blades.
5. Tower of London.
6. Soap. (40)

もちろんこれは Leacock 独特のユーモアである。彼はロンドンを訪れる度に、これら自分ですべきことをメモしたのだが、この旅程をかつて達成できた試しがないと嘆いている。一見してわかるように、この表が意図しているのは、ロンドンの知り合いに勧められた見べき観光地と、旅先の生活に必要なものを購入するということの両立である。

シャツを買う、髭剃りを買う、石鹸を買うというのは、ロンドンではアメリカ的なドラッグストアを見つけられないため、いつもの必需品を購入できないということである。文化の異なった場所でも、自分が習慣としている行動を、いつもと同じようにしたがる人間に対する皮肉である。自分自身をその人物に仕立ててはいるが、これはアメリカ大陸からイギリスを訪れ、そのような行動をとる人々への強烈なサタイアなのである。

また一方、ロンドンの観光地見物を挟んでいるのにも理由がある。この表を紹介した後で彼がとぼけた様子で不思議がっているのは、ロンドンの名所旧跡を勧めてくれた人々のほとんどが、実際にはそれらの場所を以前に一度も訪れたことがないということだ。自分で見てもいないものを、なぜ外国の人間に勧めるのか。もちろんこれはロンドン市民、さらには普段身近にある物に対して、自分の眼を通さず知ったような気持ちになっている世界の人々への当てつけなのである。両者はそれぞれの固定概念でしか、物事を見ることができない。自分の眼で見て判断することを怠っているということなのである。つまり、どちらも本当の意味での遊びではなく、真の余暇をすごしていないということになる。

それに対して、旅先での Leacock の余暇はそのような人々とは異なっていて、自分の見たまま感じたままに行動している。ベルサイユ宮殿を訪れた時のエピソード⁽¹²⁾がその一つである。列車に乗り宮殿の前に到着した Leacock は、しゃれたカフェが目前にあったので、そこで一杯の赤ワインを口にし、葉巻を燻らしていた。そして時を忘れ、ベルサイユ宮殿に関する書物をゆっくりと読んでいた。そんなことをしているうちに観光地の人込みに揉まれるのが億劫になり、結局宮殿に足を踏み入れずに、その地を立ち去ったという。これは自分の頭で考えることなく、指定された順路通りに歩き回って、理解したと勘違いしている多くの人々に対する最高の皮肉である。そして、自分のペースで自分の余暇としての時間をゆったりと過していたいという、最も Leacock らしいエピソードである。

世界も人間も余りに忙しく動いている。遥かなる歴史を紐解く時間も余裕もない。ただ、不正確に短縮された知識と、ベルトコンベヤに乗せられたような効率的な観光で人々は満足させられている。経済主義と市場論理によって、出来るだけ素早く効率的に、簡単な結果のみを抽出できるように余暇は仕組まれている⁽¹³⁾。このような状態からでは、広い視野をもち深い思考に耽る余裕を生み出すべくもない。

Essays and Literary Studies の中で彼は説いている。“The ability to think is rare. Any man can think hard when he has to: the savage devotes a nicety of thought to the equipoise of his club, or the business man to the adjustment of a market price. But the ability or desire to think without compulsion about things that neither warm the hands nor fill the stomach, is very rare.”

(19) これは、考えることに対する本質的なコメントである。何も強制がないときに考える人

はまれであるということは、観想的で創造的な余暇を正しく過すことは難しいことであると示唆しているのである。

それでは、そのような余暇を労働と照らし合わせて見る時、そこにどのような意義を Leacock は認識していたのだろうか。彼の仕事を幅広い解釈で、ひとつの労働と捉えることから議論を進めていきたい。

『余暇と祝祭』においてヨゼフ・ピーパー (Josef Pieper) は、文化人も学者も「精神的労働者」として他の労働者と同格に扱われると主張する。さらに加えて「精神的労働者も他の労働者と同様、分業化された社会的労働の中に組み込まれ、職務にしばりつけられています。」(52) と、組織化された労働管理社会に組み込まれた一員であると結論づけている。

Leacock もピーパーと同じ考えを抱いていたに違いない。それは Upper Canada College での教師としての体験がもたれていると思われる⁽¹⁴⁾。いくつかの著書で自身が語っているように、この学校での10年間は、彼にとって完全に不毛な時代であり、教師という仕事に嫌気がさしていた。学務にのみ自分の時間を奪われることは耐えがたいことだった。シカゴ大学大学院で政治経済を学び大学教師になってからは、拘束時間はもちろんのこと、収入も待遇も大きく改善された。しかし、彼にとって何よりも必要だったのは、自己の時間と場所だった。

くしくも、彼がシカゴ大学で講義を受けた、Thorstein Veblen が警告した⁽¹⁵⁾ように、社会における資本家と労働者の間に横たわる溝は、強固な資本主義というシステムによってより深いものとなっていた。Leacock も “The Unsolved Riddle of Social Justice” の中で、労働者の余りに長い拘束時間がもたらす問題を提起している。“The hours of labour are too long. The world has been caught in the wheels of its own machinery which will not stop. . . . The industrial world is restless. . . . It needs rest.” (143)

Leacock は、資本主義というシステムが人間を動かすような、倒錯した現状を批判し、余暇としての休息を求めている。それは、単なる体力回復の為の時間ではなく、人間精神の平衡をとりもどすための観想的時間を要求したものだ。*Unsolved Riddle* における警告は、観客席から眺めた学者の視点からではなく、かつて時間に追われるだけの教員生活を経験したひとりの人間として、真に充実した余暇の必要性を訴えているのである。

たしかに、Leacock は理想的な環境に恵まれていた。大学教師の主な労働といえば、授業や講義である。といっても、一日のうちで完全に拘束されている時間はそれほど多くはない。まして、学期が終われば、自由な時間が保証されている。世間的に考えれば、極めて特殊な職業である。しかし、彼が求めた余暇と労働に関しての考え方は、その特殊性を考慮にいれても吟味するに値する。Leacock の余暇に対する考えは、人生から労働時間を差し引いたも

のとしてではなかった。社会の一員として全体に貢献するという意味において、労働に大きな意義を見とめていた。それと同時に個人に与えられている人生という時間に、価値を与える余暇の権利を担保した上でのことであった。なぜなら、資本主義社会において、大量生産のため効率のみを最優先した結果生じる、人間性の喪失を目の当たりにしたからである。このような経済理論を味方にした資本家達と、金銭という力学に支配された労働者の乖離は *Arcadian Adventures* でくり返し描かれている。労働者たちは、行く先を知らされないまま、前に進んで行くより術がない¹⁶⁾。

Leacock は労働に付随するものとして余暇が存在するのではなく、労働と余暇が補完しあってはじめて人間的な生活が可能になると考えていた。だからこそ、古代ギリシャの余暇論で説かれているように、人間性を回復させるための余暇を提唱し、Orillia の Old Brewery Bay で自らがその考えを実行に移していたといえる。

しかし、Leacock の実践が覆されるような事態が、齢六十半ばの彼に起きた。それは McGill 大学が突然発表した、教員定年の引き下げであり、全く予想外のことだった。そして Leacock もその一人に入っていた¹⁷⁾。大学財政のひっ迫が原因と言われている。もともと彼は六十歳を過ぎれば、自分の体力も次第に落ちてくるであろうから、早く引退して悠悠自適の生活を送りたいと考えていた。そして、実際にその年齢に達していた Leacock ではあったが、かつて考えていたような体力的な問題は全く起こっていなかった。それどころか自分がやりたいと思う仕事は、山ほど残されていたのである。世間に名の知れていた自分は例外として認められるだろうと軽く受け取っていた。しかし、そんな彼の訴えも認められることはなく、結局そのような制度変更に従わざるをえなく、引退を余儀なくされた。Leacock はこの措置を、“Mc-Guillotine” と揶揄し、その憤りを表している。

Albert & Theresa Moritz による伝記によれば、他の大学や機関からも様々な誘いがあったようである。しかし、その全てを断り McGill 大学に残る可能性を探っていた。彼が恐れたのは、Montreal と Orillia の往復、つまり仕事と余暇の理想的な循環が途切れてしまうことであつた。別荘であるはずの Old Brewery Bay であるが、Montreal での仕事を失ってしまえば、そこはもう一つの住居という意味を失ってしまい定住の地となる。別荘という言葉の裏には、滞在することとしないことの自由が含まれている¹⁸⁾。したがって、彼にとって重要な両翼はどちらのひとつでも失うことは絶えがたかった。どちらも彼にとっては人生の宝物であつた。Leacock にとって余暇と労働は、それぞれに足りない要素を補い合う時間だったのである。

彼が充実した余暇を享受できるのは、多くの学生との絶え間ない出会いのある McGill 大学と、長い間に培った幅広い人間と交流できる都市 Montreal である。それらは彼にとって

かけがえのない時間であった。それらがあったからこそ、Moritz が “In part, he hoped to school an entire generation in his views; in part, he wished to maintain the freedom to speak that his position as university professor gave him. As a professor he was unhindered by influence or the charge of special interests.” (270) と言うように、Leacockらしい自由な言論を行なえたのであり、それだけ McGill 大学に身を置くことに愛着をもっていた。もちろん、彼の大半の人生を過したカナダという国も、その時にはすでに真の故郷になっていたというのも、忘れてはならない大きな理由の一つである⁽¹⁹⁾。

だがそのような定年後に対する不安は、それほど長続きはしなかった。引退後、Old Brewery Bay を主な仕事場としていたが、著名であるがゆえ執筆や講演依頼が押し寄せ、彼の生活は引退前より忙しいものになっていたのである。依頼を受けてカナダ西海岸へと向かう講演旅行も精力的に行った。この旅での見聞は、*My Discovery of West* という形で出版され、その他にも *Here Are My Lectures* などの数冊の出版物もそれに続いた。

しかし、軽やかな精神にあふれていた Leacock の文章にも、社会から引き離された引退者としての影が見え隠れする。*Too Much College* の中においてこれから引退していく下の世代に向けて次のように語った。

But as to this retirement business, let me give a word of advice to all of you young fellows round fifty. Some of you have been talking of it and even looking forward to it. Have nothing to do with it. Listen; it's like this. Have you ever been out for a late autumn walk in the closing part of the afternoon, and suddenly looked up to realize that the leaves have practically all gone? You hadn't realized it. And you notice that the sun has set already, the day gone before you knew it — and with that a cold wind blows across the landscape. That's retirement. (175)

多くのことをユーモアで包み込んで読者に提示していた Leacock であるが、ここではそのような被膜を見てとることはできない。自分の身に起こったことをあまりにも素直に語っている。Leacock は、大学で社会との接点を享受し、余暇は自己の人生をより豊かで実りあるものにしていった。ユーモア作品をはじめとする彼の創作は、仕事と余暇、忙と閑、動と静のリズムの間から生まれていた。しかし、労働なき閑暇あるいは強制的な余暇の中で、自身の老いと向き合う時、それは既にゆとりある時間ではなく、果てしない虚無に向かう細い道であった。

The fact that most of them [Canadian poets] owe their success to nature-description-poetry does not make any more tolerable the great mass of the description in verse, whether free or worth money, of the Canadian woods, trees, birds beasts and waterfalls. Our country is rich in its extent. Granting a thousand poets as the maximum that we could raise they have three thousand square miles for each of them to work on. (201)

ただ、*How to Write* で述べているように、Leacock は目の前に存在する雄大なカナダの自然と、彼が慈しんできた言葉の果てしない可能性を信じていた。

結び

“Old age is the ‘Front Line’ of life, movining into No Man’s Land. No Man’s Land is covered with mist. Beyond it is Eternity. As we have moved forward, the tumult that now lies behind us has died down. The sounds grow less and less. It is almost silence.” (220) *Remarkable Unkle* に所収された “THREE SOCRE AND TEN: The Business of Growing Old” という小品の冒頭である。人生の残り時間について語る Leacock の筆致は、無表情と言ってもよいほど淡々としたものだ。労働なき余暇は老いと向き合う長い時間なのだろうか。

「生きることは生涯かけて学ぶべきことである。そして、おそらくそれ以上に不思議に思われるであろうが、生涯をかけて学ぶことは死ぬ事である。」(245) とセネカが奇しくも言うように、余暇の概念の背後には、必ず死という絶対的存在がある。死が避けられないものだからこそ、「良く生きる」という命題が生まれる。自己の本質的発現としての余暇なしに、人間は真に生きているとは言えない。良き余暇を過した分だけ英知が生まれる。

余暇は決して怠惰な非活動ではなく、われわれを縛り付けている何物かからの解放として捕らえられるべき活動である。真の精神活動は余暇において育まれる。Leacock が求めているのは余暇から発する、人間の尊厳なのである。それは、現代の社会システムに侵食されてしまった自己の時間を、自分の手の中に取り戻す作業なのだ。自分にとって、人生にとって、純粹に必要な時間を選択し、実行していくことが本当の余暇だといっているのだ。

個人として考えれば、仕事も余暇も全ては主なき場所へと向かう過程である。しかしだからといって、それらの価値は少しも減ずることはない。ただ自身がそれら全ての価値を認め、最後まで引き受けているならば、過ぎ去った年月は必ず未来のどこかに付加され、次の世代に引き継がれる。Leacock はこの小品の最後で言っている。

“Give me my stick. I’m going out to No Man’s Land. I’ll face it.” (255)

注

- (1) MontrealでのLeacockのこのような生活は、John Cullitonが回想している。彼はLeacockの学生であり、後に彼もMcGill大学の教授になっている。彼によれば、“Stephen Leacock loved Montreal. He liked living at the foot of the mountain on which he walked each morning. It was the home of two cherished institutions: McGill University and the University Club” (v)とあり、Montrealでの日々を楽しんでいたLeacockの様子がうかがえる。
- (2) Curryによれば、“He had the distinction of campaigning for John Hackette, Q. C. of Montreal and seeing him elected the only Conservative Member of Parliament from Quebec.” (88-9)とある。
- (3) Old Brewery Bayは、Leacockの死後、手入れされることなく一度は荒れ果ててしまうが、様々な困難を乗り越え1958年にLeacock記念館として再建されるまでの経過が、James A. McGarveyの*The Old Brewery Bay*に詳しく描かれている。
- (4) その言い伝えの他に、LeacockがMcGill大学でついでに職の前任者がDow Breweriesの創立者の一族だったということもあったようだ。“A convivial moderate drinker in a country that was rapidly being overrun by the fanaticism of the temperance movement, Leacock would have quietly enjoyed the irony of being indebted to “beer interests” for his latest academic distinction” (44-5)とJames DoyleはLeacockの遊び心を解説している。
- (5) このボートハウスも復元されている。現在では人形やおもちゃが置いてあり、子供達がいつでも自由に遊ぶことのできる遊戯室として利用されている。
- (6) デュマズディエ自身の言葉では、“de délassement, de divertissement, de développement” (26)となっている。
- (7) デュマズディエの議論では、余暇の三機能は並列し、均衡したものとして説明され、人間個人の内面的発展を考慮してはいない。余暇は社会構造に組み込まれたものとして扱っている。
- (8) “otium”というラテン語で表現される余暇の概念は、現在のレクリエーション的な視点とは異なっている。ケベック大学の哲学者Michel Bellefleurは、‘otium’を「‘otium’という言葉は大変古いもので、その後の似たような言葉の起こりとなるものだが、そこから派生した言葉は、休息、リラックス、弛緩、楽しみ、自由な趣味の発展、才能、適性、などであり、‘otium’という言葉の様々な特徴を表している。」(“L’otium faisait figure de term souche auquel étaient apparentés d’autres termes que l’on pourrait qualifier d’intermédiaires, en ce sens qu’ils en précisaient les manifestations concrètes tel le repos, la relaxation, la détente, l’amusement, le libre développement de goûts, talents et aptitudes, et ainsi de suite.” (8))のように説明し、「‘otium’に関する倫理的伝統ともいえる大きな2つの傾向から現在にまで残っている所産は、享楽主義と禁欲主義である。」(“L’antiquité nous a légué deux grands courants ou traditions éthiques à propos de l’otium, l’épicurisme et le stoïcisme. (10))と付け加えている。
- (9) 創造的作品を描くことの難しさについて、Leacockは*Sunshine Sketches*のPrefaceの中で次のように述べている。“Many of my friends are under the impression that I write these humorous nothings in idle moments when the wearied brain is unable to perform the serious labours of the economist. My own experience is exactly the other way. The writing of solid, instructive stuff fortified by facts and figures is easy enough... But to write something out of one’s own mind, worth reading for its own sake, is an arduous contrivance only to be achieved in fortunate moments, few and far between.” (xv-xvii)
- (10) “Fifty years ago I was a resident master in a boarding-school, a sort of all-day-and-all-night job, with a blind wall in front of it. To find a way out of it, and on, I took to getting up at five o’clock in the morning and studying political economy for three hours, every day, before school breakfast. This process so sharpened my sense of humour that I earned enough money by it to go away and study political economy; and that, you see, kept up my sense of humour like those self-feeding machines...” (57)
- (11) ロジェ・カイヨワ (Roger Caillois) は『遊びと人間』において、文化の原動力としての遊びという概念をホイジンガと共有しているが、「どのように神経をつかい、どのように能力を発揮し、どのように厳密さを求めようと、しよせん遊びとは楽しい気まぐれであり、むなしい気晴らしにすぎないと。」(14)とある

ように、彼の遊びは賭け事やゲーム、スポーツを中心に論じているため、その偶然性、模倣性、集団性、象徴性へと論が拡散してしまっている。

- (12) *Behind the Beyond* で紹介されているエピソードである。“Personally I plead guilty to something of the same spirit. Just where you alight from the steam tramway at Versailles, you will find, close on your right, a little open-air café, with tables under a trellis of green vines. It is as cool a retreat of mingled sun and shadow as I know. There is red wine at two francs and long imported cigars of as soft a flavor as even Louis XIV could have desired. The idea of leaving a grotto like that to go traipsing all over a hot stuffy palace, with a lot of fool tourists, seemed ridiculous. But I bought there a little illustrated book called the *Château de Versailles*, which interested me so extremely that I decided that, on some reasonable opportunity I would go and visit the place.” (93-4)
- (13) ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard) は、「われわれのシステムのように統合された全体的システムのなかでは、時間の使い方に関する自由は存在しないだろう。…余暇の根本的な意味は、労働時間との差異を示せという強制である。」(293) と現代社会における、余暇自体の空虚な実体を暴いている。
- (14) “For ten years I was a schoolmaster. Just thirty years ago I was appointed to the staff of a great Canadian school. It took me ten years to get off it. Being appointed to the position of a teacher is just as if Fate passed a hook through one’s braces and hung one up against the wall. It is hard to get down again.” (17) と Leacock は *College Days* の中で語っている。
- (15) Veblen の ‘leisure’ は、ここで論じている「余暇」というよりも、無機質な「閑暇」、空虚な「時間」として用いられている。*The Theory of the Leisure Class* に “It has already been remarked that the term ‘leisure,’ as here used, does not connote indolence or quiescence. What it connotes is non-productive consumption of time.” (34) とあるように、Veblen の ‘leisure class’ とは、非生産的消費として ‘conspicuous leisure’ を過す人々を意味する。
- (16) この点において、「前へ前へと突き進むプロ (PRO-) 意識が強調されたのが二〇世紀の特色だった」(198) という藺田碩哉氏の考えは示唆に富む。プログラム、プロセス、プロフィット、プロミス、プロポーズ、プロバイダーなどの言葉に対して、リラックス、リフレッシュ、リサイクル、レクリエーション等「リ (RE-) の意識」を提唱している。
- (17) “Pursuant to the able Resolution, the Governors have instructed me to notify you that you will be retired from University on May 31st, 1936.” (247) Curry の伝記によると、1935年6月12日の書簡となっている。
- (18) Curry も “Leacock at leisure meant Leacock at loose ends. He was accustomed to taking his recreation when he wanted it, but he had never had it forced on him before.” (265) と言及し、Leacock の自由意思としての余暇を支持している。
- (19) 彼が生まれたイギリスからも多くの誘いがあった。Leacock は “Thank you, Mother England, I don’t think I’ll ‘come home.’ I’m ‘home’ now.” (211) という Leacock の言葉を Legate は紹介している。

引用文献

- Bellefleur, Michel. *Le loisir contemporain: Essai de philosophie sociale*. Sainte-Foy: Presses de l’Université du Québec, 2002.
- Culliton, John. ed. “Introduction.” *Leacock’s Montreal* by Stephen Leacock. Toronto: McClelland and Stewart, 1948.
- Doyle, James. *Stephen Leacock: The Sage of Orillia*. Toronto: ECW P, 1992.
- Dumazedier, Joffre. *Vers une civilisation du loisir?* Paris: Éditions du Seuil, 1962.
- Kimball, Elizabeth. *The Man in the Panama Hat*. Toronto: McClelland and Stewart, 1970.
- Leacock, Stephen. *Arcadian Adventures with the Idle Rich*. Toronto: McClelland and Stewart, 1959.
- . *College Days*. Toronto: S.B.Gundy, 1923.
- . *How to Write*. New York: Dodd, Mead, 1943.
- . *Last Leaves*. Toronto: McClelland and Stewart, 1945.

- . *My Discovery of England*. New York: Bodley Head, 1922.
- . *My Remarkable Uncle*. Toronto: McClelland and Stewart, 1942.
- . *Sunshine Sketches of a Little Town*. Toronto: McClelland and Stewart, 1931.
- . *Social Criticism: The Unsolved Riddle of Social Justice and Other Essays*. ed. Alan Bowker. Toronto: U of Toronto P, 1996.
- . *Too Much College, or Education Eating Up Life: With Kindred Essays in Education and Humour*. New York: Dodd, Mead, 1939.
- Legate, David M. *Stephen Leacock: A Biography*. Toronto: Doubleday, 1970.
- McGarvey, James A. *The Old Brewery Bay: A Leacockian Tale*. Toronto: Dundurn P, 1994.
- Moritz, Albert and Theresa. *Leacock, a Biography*. Toronto: Stoddart Publishing, 1985.
- Ralph, Curry. *Stephen Leacock: Humorist and Humanist*. Garden City: Doubleday, 1959.
- Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class*. New York: Modern Library, 2001.

- アリストテレス『アリストテレス全集15』岩波書店，1969年
- カイヨワ，ロジェ『遊びと人間』多田道太郎訳 講談社学術文庫，1990年
- ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司他訳 紀伊国屋書店，1995年
- セネカ『道徳論集（全）』茂手木元蔵訳 東海大学出版会，1989年
- 藺田碩哉「現代哲学から見た余暇」『余暇学を学ぶ人のために』瀬沼克彰他編 世界思想社，2004年 188-201頁
- デュマズデイエ，ジョフリ『余暇文明へ向かって』中島巖訳 創元社，1972年
- ホイジンガ，『ホモ・ルーデンス』高橋英夫訳 中公文庫，1973年
- ピーパー，ヨゼフ『余暇と祝祭』稲垣良典訳 講談社学術文庫，1988年